

佐賀県文化財調査報告書第33集

姫方原遺跡

—三養基郡中原町所在—



佐賀県教育厅文化課

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第33集

姫方原遺跡

= 三養基郡中原町所在 =

佐賀県教育厅文化課

佐賀県教育委員会

はしがき

佐賀県の東部地帯には脊振山系から南へ向かって低段丘が多く派生していますが、この低段丘には主として弥生時代から古墳時代へかけての遺跡が濃密に分布していて、重要な古代遺跡圏を形成しているのであります。

この姫方原遺跡もまた、この遺跡圏内に所在していて、県史跡姫方遺跡から中原中学校遺跡そして姫方原遺跡と南へ帯状に連なる遺跡帶の南端に形成された弥生時代から古墳時代にかけての住居址と墳墓からなる複合遺跡であります。

この調査は、宅地造成に際して発見されたものであります。中野建設株式会社の協力を得て実施したものであります。調査結果についても早急に整理がなされていましたが、諸般の事由でこのたびの刊行となりました。

本書が本県古代遺跡の研究にいささかでも貢献するところがあり、また遺跡の調査に対する県民の方々のご理解をうる一助ともなれば幸甚と存する次第であります。

なお、本書の刊行にあたって、調査、整理および執筆を担当していただいた方々、および関係各位のご協力に対して深く感謝いたします。

昭和51年3月25日

佐賀県教育委員会

教育長　瀬戸口　芳夫

もくじ

まえがき

I	姫方原遺跡の調査経過	1
II	姫方原遺跡の環境	3
III	姫方原遺跡の遺構・遺物	6
1	遺跡の概要	6
2	土壙墓	8
3	住居跡	10
(1)	A区の住居跡	10
(2)	B区の住居跡	10
(3)	C区の住居跡	15
(4)	D区の住居跡	21
4	方形周溝墓	28
IV	総括	37

あとがき

挿図目次

第1図	姫方原遺跡の周辺図	4
第2図	土壙墓実測図	8
第3図	土壙墓出土の土器実測図	9
第4図	第1号住居址実測図	11
第5図	第2号住居址実測図	11
第6図	第3号住居址実測図	13
第7図	第3号住居址出土土器実測図	14
第8図	第5・6・7号住居址実測図	16
第9図	第6・7号住居址出土土器実測図	19
第10図	第8号住居址実測図	20
第11図	姫方原遺跡出土石器実測図	20
第12図	第9号住居址実測図	22
第13図	第1号貯蔵庫実測図	22
第14図	第2号貯蔵庫実測図	22
第15図	第10号住居址実測図	23
第16図	第11号住居址実測図	23
第17図	第10号住居址出土土器実測図	25
第18図	姫方原方形周溝墓実測図	28
第19図	方形周溝墓東溝断面図	29
第20図	方形周溝墓出土遺物実測図(1)	31
第21図	方形周溝墓出土遺物実測図(2)	33
第22図	方形周溝墓出土遺物実測図(3)	34

図版目次

1. 土 墓(1).....	41
2. 土 墓(2).....	41
3. 土 墓内出土状況.....	41
4. 土 墓内出土土器.....	41
5. 第1号住居址.....	42
6. 第2号住居址.....	42
7. 第3号住居址.....	43
8. 第3号住居址出土状況.....	43
9. 第6号住居址.....	44
10. 第6号住居址出土土器.....	44
11. 第9号住居址.....	45
12. 第2号貯藏穴.....	45
13. 第10号住居址.....	46
14. 第10号住居址出土状況.....	46
15. 第10号住居址出土土器.....	47
16. 姫方原方形周溝墓.....	48
17. 方形周溝墓東断面.....	48
18. 北溝遺物出土状況（東側）.....	49
19. 北溝遺物出土状況（西側）.....	49
20. 東溝遺物出土状況（北側）.....	50
21. 東溝遺物出土状況（南側）.....	50
22. 方形周溝墓出土土器(1).....	51
23. 方形周溝墓出土土器(2).....	52
24. 方形周溝墓出土土器(3)及U鉄斧.....	53
25. 方形周溝墓出土土器(4).....	54

I 発掘調査の経過

1. 調査にいたるまでの経過

昭和48年7月、中野建設株式会社は、佐賀県三養基郡中原町字姫方原に約2万m²の土地を購入して姫方原住宅団地の造成工事を行っていた。

佐賀市内の新聞社から「姫方原の宅地造成工事現場で住居址らしい遺構が出土している」との通報を県教育委員会が受けたのは7月17日のことであった。

県教育委員会は、早速、県教育庁文化財調査監木下之治ほか2名を現地に派遣し、現地の状況を確認することにした。

現場は姫方原段丘の頂上部に鎮座する天満宮の南側および町立中原中学校の南側へかけての一帯をその造成範囲としており、この段丘の東斜面に住居址数戸の存在が認められた。この時、すでに佐賀大学考古学研究会会員の手によって、一戸分の住居址の発掘作業が行われていた。

県教育委員会は現地確認の結果にもとづき、中野建設株式会社に対して、当該地域での宅地造成工事の中止と、造成工事に先だつ遺跡発掘調査の必要性を申し入れると共に、発掘調査に関する具体的協議を重ねた。

この結果、発掘調査に要する費用負担ならびにその支払い業務は中野建設株式会社が行うことで合意が成立し、原因者負担による発掘調査を実施する運びとなった。

県教育委員会は中野建設株式会社からの遺跡発掘調査の依頼を受けて「姫方原遺跡発掘調査委員会」を組織し、昭和48年7月24日から、同遺跡の緊急発掘調査を実施した。

2. 姫方原遺跡発掘調査団の組織

(1) 委員会

委員長 濑戸口 芳夫 佐賀県教育委員会教育長

委員 鏡山 猛 佐賀県文化財専門委員

〃 三好 不二夫 〃

〃 七田 忠志 〃

〃 進藤 担平 〃

〃 城島 正祥 〃

(2) 事務局

局長 田中 寿義雄 佐賀県教育庁文化課課長

次長 権藤 鎮雄 中原町教育委員会教育長

〃 平山 政己 佐賀県教育庁文化課課長補佐

庶務原 宏明 佐賀県教育庁文化課庶務係長
〃 中野安正 〃 庶務係
〃 青柳智男 中原町公民館主事
〃 平野保男 〃
〃 中野建設株式会社

(3) 調査員

調査主任 木下之治 佐賀県教育庁文化財調査監
調査責任者 石隈喜佐雄 佐賀県教育庁文化課文化財係
調査員 木下巧 〃
〃 仏坂勝男 〃
〃 天本洋一 〃 嘱託
〃 藤井要 〃 〃
〃 尾形徳之 佐賀県遺跡調査員
〃 野崎伊三雄 〃
調査補助 七田忠昭 国学院大学学生

3. 発掘調査の経過

現地確認 昭和48年7月17日

発掘調査 自、昭和48年7月24日

至、昭和48年8月24日

遺物整理 自、昭和49年2月25日

至、昭和50年7月31日

執筆・編集 自、昭和50年6月1日

至、昭和50年12月31日

県教育庁文化財調査監木下之治氏の陣頭指揮のもと、昭和48年7月23日早朝から用具の運搬および調査準備を行い、翌24日午前10時から発掘調査の作業を開始した。

盛夏のころであり、例年になく日照りが強い炎天下での作業は相当な困難を伴ない、調査期間の後半には調査員の疲労も目立ち、治療と併行しての調査であった。しかし、貯蔵穴をともなう住居址群や豊富な土器類を埋藏した方形周溝の発見など多大の成果をあげることができた。

II 姫方原遺跡の環境

1. 地理的環境

三養基郡中原町大字蓑原字姫方原1639番地に姫方原遺跡は所在する。脊振山系の南山麓の神崎より東部地域には南北に延びる舌状の独立低段丘が発達している。姫方原遺跡が所在する低段丘は、蓑原部落の南500mにある栗崎山(標高55.9m)を主峰として、南北約1300m・東西約400mを測り、水田面からの比高は北部で17mであって南下するに従って低くなっている。この姫方段丘の西側には寒水川が南流しその東側には小支流があって中島で合流しており、この流域は水田として開発されている。

栗崎と姫方を分離するかのように国鉄長崎本線がこの段丘を南北に二分して東西の方向に走り、その南方500mには東西の方向に国道34号が通じ、ともにこの段丘を切断している。この姫方原遺跡は、国鉄と国道34号に挟まれた段丘上に位置している。

2. 歴史的環境

姫方原遺跡の周辺にはいくつかの遺跡が存在するが、これらの遺跡は低段丘上あるいは山麓部に位置している。今まで知られている遺跡の大半は弥生時代の豪棺墓遺跡であり、また古墳時代の墳墓である。

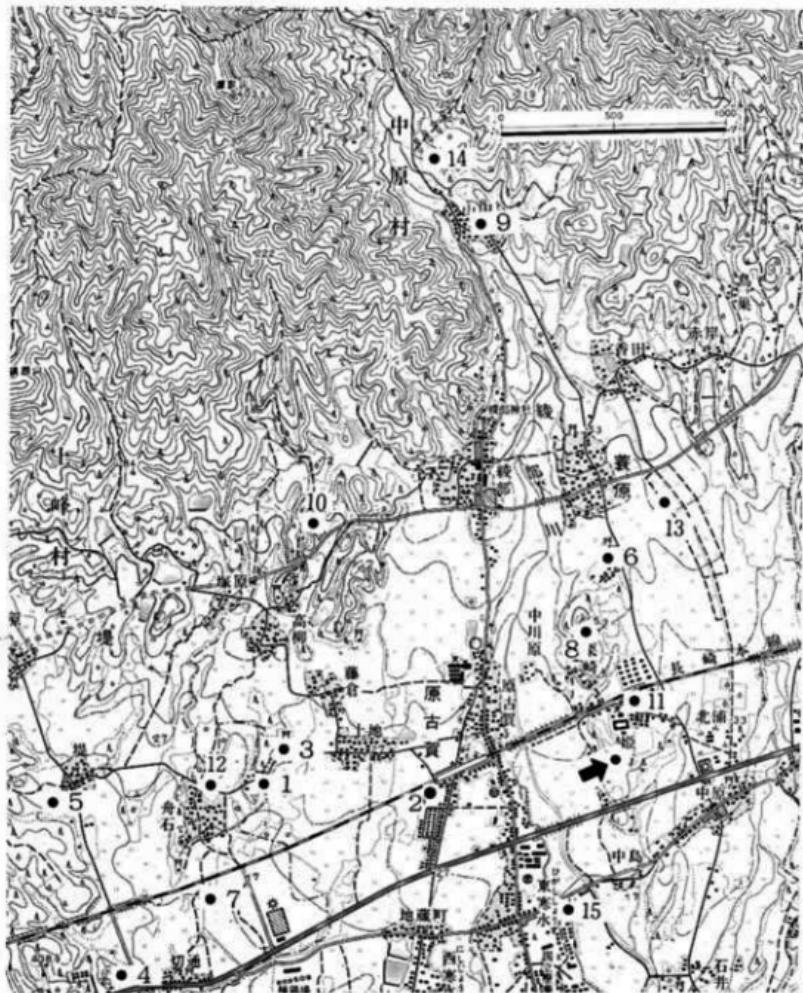
この姫方段丘の北部——栗崎山には姫方遺跡があつて400組を越える大豪棺墓群・石棺墓・土壙墓などが営まれ、中原中学校北側の国鉄長崎本線の建設工事に際しても多量の豪棺が出土したといわれる。⁽¹⁾ 栗崎山の北方200mの蓑原部落には八幡社豪棺遺跡があり、⁽²⁾ 姫方原遺跡の西方900mにドンドン落豪棺遺跡がある。⁽³⁾ また、姫方段丘の西方2500mの低段丘の東側斜面に上地第1号豪棺遺跡あり、⁽⁴⁾ その南方200mに西寒水豪棺遺跡がある。⁽⁵⁾ また、⁽⁶⁾ その南西500m地点に船石豪棺遺跡があり、⁽⁷⁾ その南西約500mに切通遺跡があつて豪棺墓がその主体を占めている。⁽⁸⁾ 切通遺跡の北北西約900m地点に五本谷弥生遺跡があつて、豪棺墓・土壙墓が確認されている。

このように姫方原遺跡周辺には弥生時代中期を主体とする遺跡が低段丘に分布しているのであって、この地域は、弥生時代中期前葉から農耕集落が発達し開発が進められたことを物語るものであろう。

弥生時代後期になると遺跡は激減する傾向がみられるが、なお、姫方遺跡・五本谷遺跡などいくつかの豪棺遺跡の存在がみられる。

弥生時代の終末期から古墳時代にかける遺跡は、姫方原方形周溝墓・姫方方形周溝墓をはじめ、上峰村堤方形周溝墓から姫方遺跡の環状列石土壙墓へと続き、そして姫方遺跡の雄塚・雄塚や姫方前方後円墳などを経て横穴式石室を内部主体とする小円墳群が北方の山麓

第1図 姫方原遺跡の周辺



- ◆姫方原遺跡
- ①西寒水跡生妻棺遺跡
- ②ドンドン落跡生妻棺遺跡
- ③上地第1号跡生妻棺遺跡
- ④切通遺跡
- ⑤五本谷跡生妻棺遺跡
- ⑥八幡社妻棺遺跡
- ⑦船石妻棺遺跡
- ⑧姫方遺跡
- ⑨山田古墳群
- ⑩大塚
- ⑪姫方前方後円墳
- ⑫谷渡古墳群
- ⑬養原古墳
- ⑭山田藏骨器出土地
- ⑮町南遺跡

部に形成されるようになる。山田古墳群・笛吹山古墳群などがそれである。

このように姫方原辺には相当大きな農耕集落がはやくから形成されていたものと推察され、肥前風土記にいう三根郡の漢部郷の母胎がこの時期に形成されていたことを物語るものであろう。

- (1) 木下之治・木下巧他「姫方遺跡」佐賀県文化財調査報告書第30集 佐賀県教育委員会
- (2) 松尾楨作「中原村の史話伝説」
- (3) 「佐賀県の遺跡」佐賀県教育委員会
- (4) 松尾楨作「佐賀県考古大観」祐徳博物館
- (5) (3)と同じ
松尾楨作「中原村土地甕棺遺跡」佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告書第10集
- (6) (3)と同じ
- (7) 昭和47年3月発掘調査 上峰村教育委員会 甕棺墓33・土壙墓2基が確認されている。
- (8) 佐賀県教育委員会で調査。昭和49年
- (9) (2)と同じ
- (10) 松尾楨作「笛吹山古墳群」佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告書第8集

III 姫方原遺跡の遺構・遺物

1. 遺跡の概要

蓑原部落を北端として、東西約300m～400mの幅で南へのびている姫方低段丘は、国道34号線付近で平地へ移向している。この低丘陵の最高所は、姫方遺跡付近であって、標高55.9メートルであり、西側には寒水川が南流していてその流域には水田が開け、東側にも、水田が南北の方向に開けていて、寒水川の支流が南下している。

この低段丘上には、町立中原中学校が所在し、民家が点在しているとともに、住宅団地が諸所に造成されている。また、長崎本線がこの段丘の中央を東西の方向に通っていて、丘陵を南北に2分し、地形や地貌は著しく変化している。

この低段丘上は、ほぼ全域にわたり、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡群であって、鉄道線より北が大体において窓棺墓。土壙墓。石棺墓または方形周溝墓。環状列石土壙墓。雄塚。雌塚などの弥生時代から古墳時代にかけての墳墓地帯としての遺跡であり、南側は弥生時代から古墳時代にかけての住居址群の遺跡であるということができる。しかし、北側の姫方遺跡からは墳墓群の他に2戸の住居址が発見されており、南側の姫方原遺跡から住居址の他に方形周溝墓が出土していて、性格の異なる遺溝がいくらか例外的に介在しているということができる。

姫方原遺跡は、この低段丘の南端付近に位置し、標高30m余りの所に立地している。調査を実施した区域は、中原中学校の南端から国道までの間であって、丘陵の尾根付近から東斜面にかけての部分であるが、尾根上に鎮座している天満宮の境内は、調査の対象から除外されている。この調査は、住宅団地造成に伴う緊急調査であったが、ブルトーザによる造成が開始されてから遺跡の存在が発見されたため、遺跡の一部はすでに破壊されていた。また、住宅団地造成予定地外へ遺構がひろがっている部分もあることが確認されたのであるが、その部分は調査対象から除いたため、この姫方原遺跡の全貌を明らかにすることはできなかった。

この遺跡の遺構は、天満宮境内の周辺にはば集中していて、中学校の南側及びその東南方、また国道沿線付近からは遺構が発見されなかった。この遺跡の遺構は、住居址と方形周溝墓とからなっているが、すべての遺構が丘陵の尾根上またはその至近地点に位置しているのが注目される。

住居址は、戸数ずつ群をなして点在しているが、平面プランは、方形・円形・不整形と変化に富み、しかも一部には重複している住居址もあり、住居址の内外から大小多くのピットが発見されたものもあって、比較的複雑な様相を呈している。発見された土器は、弥生式から土師器によよんでいて、この住居址群が弥生時代から古墳時代にかけ

けての比較的長期間にわたるものであることを物語っている。

方形周溝墓は、本県内からはこの遺跡の北方に当る姫方遺跡・鳥栖市本川原遺跡などから発見されているが、この姫方原の方形周溝墓は、周溝内に多数の土器を包含していた点が、他の方形周溝墓との大きな相異点であって、この遺構の価値を高らしめている。しかし、遺構のほぼ半分が調査の対象外であったため、その全貌を明らかにすることはできなかった。

この姫方段丘の遺跡については、「中原村の史話伝説」（松尾頼作著。昭和30年11月3日発行）があり、また、古賀孝著「考古日録」（昭和33年6月1日発行）に、「上峰中原の古墳、弥生式遺跡」・「姫方東部の丘陵、栗崎の竪穴式石室」としてその一部がとりあげられている。しかし、この遺跡は調査されることなく、次第に湮滅の度を深めていきつつあったのであるが、住宅団地造成に伴ない47年3月から49年1月まで2か年近くを要して、この丘陵の北端に近い姫方遺跡の発掘調査が実施された。（「姫方遺跡」49年3月、佐賀県教育委員会発行。）次いで49年の夏には、段丘の南端にあるこの姫方原遺跡が住宅団地造成に伴なって調査され、さらに、50年3月には中原中学校の校舎改築に伴なって、その敷地内的一部の遺構が調査され、住居址が発見されている。

姫方段丘の遺跡については、この3ヵ所の発掘調査が実施されたのであるが、これによって、この段丘の遺跡の性格等も次第に明らかになりつつあるということができるのではなかろうか。

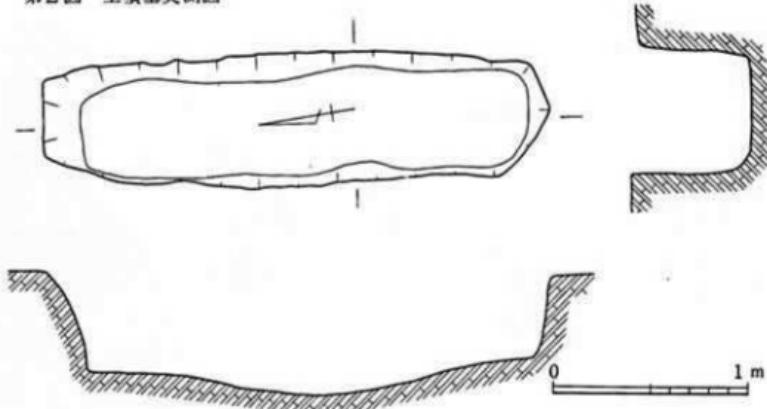
2. 土壙墓

この遺跡の全域、特にC区からD区にかけて不整形の土壙や大小のピットを無数に確認したがその性格を明確にすることはできなかった。

これらの中で土器を内蔵していた土壙墓と推定されるものをとりあげてみることにする。

この土壙は第1号住居址の北20mの地点にある。上面の長軸2.6m・短軸70cm、床面の長軸2.3m・短軸50cm、深さ約50cmを測り、船形状の平面プランをもっている。この土壙の底部中央はやや深くなっている。床面から20cmないし25cmまでは黒褐色土層であり、その上部は灰混りの黒土層で覆われ鉢・甕形土器が破壊された状態で土壙の中央部から

第2図 土壙墓実測図

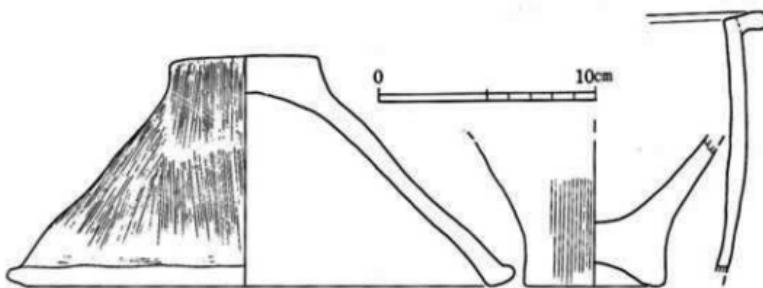


出土した。この土器群には高低差がほとんど認められない状態に散布しており、その上面約10cmは薄い粘土で覆われていた。

このことは、この土壙の在り方を複雑にしている。これは遺体を埋置した後土器と火を使用する葬祭が何らかの形式で行われ、その後この土壙を粘土で張ったのではないかと推察されるのである。また、この土壙上面に土盛り或いはその他石材による墓標等の有無について、現時点では確認できなかった。

この土壙墓から出土する土器群は、弥生時代中期前葉に比定されるものであって、姫方原遺跡の開発を時間的に把握する意味において「姫方原I式土器」と呼ぶことにした。

第3図 土壙墓出土の土器実測図



3. 住居址

(1) A区の住居址

天満宮の東南方に位置していて、方形周溝墓から東へ緩傾斜をもって降下するその傾斜面のほぼ中間付近に当っている。この遺跡では、南端にあって、しかも最も低位置にある遺構である。2戸の円形プランを有する住居址が約5mの間隔をもって、東西の方向に並んで出土したのであるが、東側の住居址は調査期間中に襲った豪雨のため完全に湮滅してしまった。なお、遺物の散布や土質の変化などからみて、この付近に住居址が数戸分存在しているのではないかと推定されたが、確認することはできなかった。

〔1号住居址〕

南北4.5m、東西5mの径を有する円形プランの竪穴住居址であって、壁面の高さは10cm内外である。西側の壁面は多角的な形態を呈しているが、全体的に見た場合はやはり円形プランの住居址として把握すべきものであろう。しかし、この姫方原遺跡の住居址群の中には、他にも5号住居址のように多角的なプランではないかと思われるものが存在しているので、今後再検討を加える必要があろうかと考えられる。

床面は、平坦にならされていて、床面には大小いくつかのピット状の掘込みがあるが、柱穴については確認することができなかった。床面のほぼ中央に位置している上辺60×30cm、深さ30cmの長方形プランの掘込みは、炭化物の出土は少なかったけれどもやはり炉址ではなかろうかと推定される。

この住居址からの出土遺物は極めて少なく、小形甕片・黒曜石剝片などである。なお、この住居址の周辺からは、磨製石斧・抉入石斧・石ノミなどが1個ずつ出土している他、1面が研磨された軽石が1個と土師器の瓶把手が1個発見されている。

変形の円形プランであるこの1号住居址は、出土した遺物からみて、弥生時代中期ごろのものではないかと推定される。

(2) B区の住居址

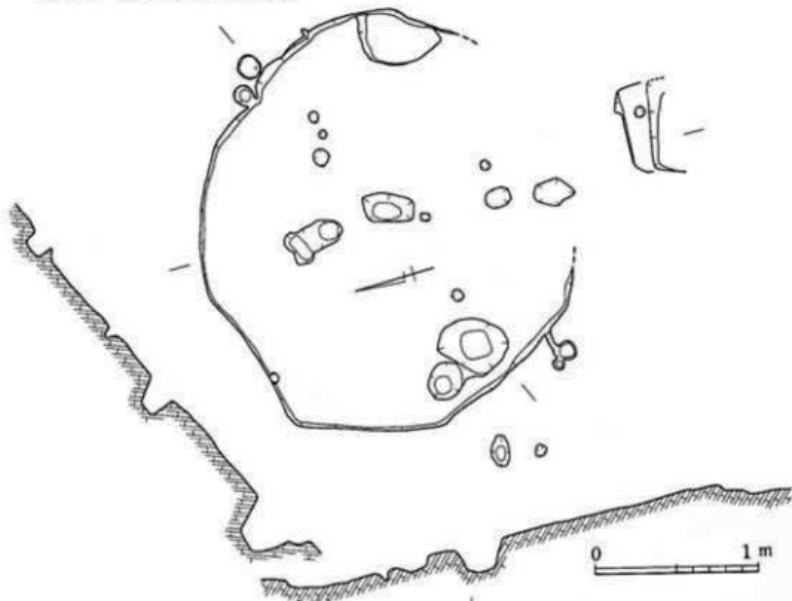
概要

姫方原段丘頂上部に鎮座する天満宮の南東部分をB区として調査した。

天満宮の南東約50mのところに隣接して2戸の住居址があり、さらにその南方約25mに1戸分の住居址が確認された。この3戸の住居址はいずれも方形のプランをもつ竪穴住居址である。

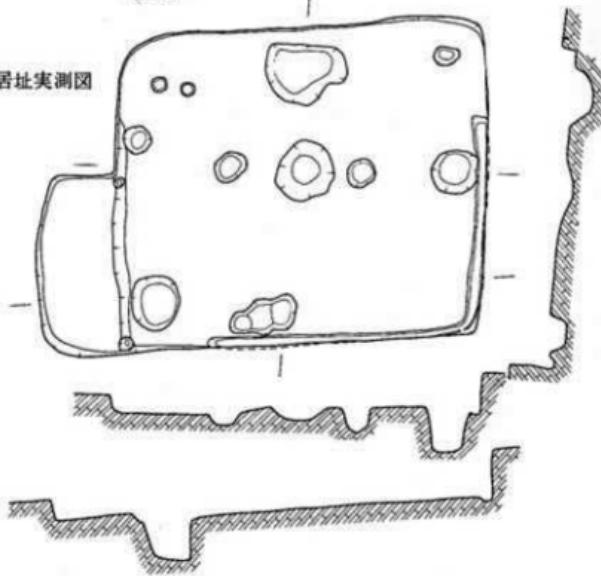
これら、3戸分の住居址が位置する地域の北側、即ち中原中学校の南側は谷間となっていて、除々に高度を減じつつ、東側低所の水田に通じている。住居址が位置する地点の東側は、後世に地形が改変され、現存する民家をはさんで低地の水田に至っているた

第4図 第1号住居址実測図



第5図

第2号住居址実測図



め、B区住居址の東限については確認できなかった。

〔2号住居址〕

B調査区の東端に近い所に2号住居址は位置する。

この住居址は東辺4.5m、西辺5.3m(造り出し部分を含む)南辺3.8m、北辺3.7mで、ほぼ長方形に近いプランをもつ竪穴住居址である。壁面は四壁とも、ほぼ垂直な立ちあがりであって、床面までの高さは、より高所に面する西壁と南壁では約48cm、低所の北および東の両壁ではそれぞれ18cmと21cmである。

床面積は約16m²であるが、この北東部分に造り出しの形で「ベッド状遺構」が設けられている。ベッド状遺構は巾70~90cm、長さ210~220cmの長方形を呈し、床面からの高さは12cmである。

ベッド状遺構に南接し、西壁から約20cmの位置に上面径60~70cm、底面径40~50cm、深さ46cmの階円形のピットがある。これは、この住居址に第一次的に付属する貯蔵穴であると推定されるが、このピットからは遺物は発見されなかった。

床面のはば中央部付近で上面径70cm、底面径35cm、深さ約13cmのはば円形に近いピットが認められた。このピット内からは、灰層の堆積と僅かながら焼上の痕跡が認められたので、この住居址に付属する炉址であろうと考えられる。このピットの南北両側にそれぞれ32.3cm、13.7cmの深さをもつ円形に近いピットが確認されたが、その性格については明らかでない。

住居址の西側および南側壁面と床面が交叉する所に巾10cm、深さ4~7cm程度のU字形の小溝があげてある。このU字溝は雨水などの誘導溝であろうと考えられる。

この住居址内には前記のものも含めて13のピットがあるが、柱穴についての推定はできなかった。

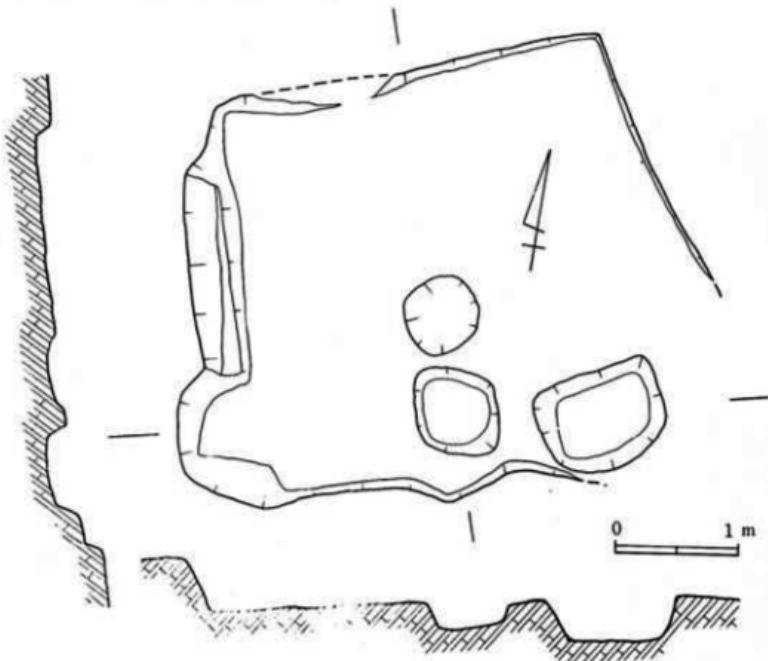
なお、この住居址からは、若干の土器細片が出土したのみである。

〔3号住居址〕

この住居址は2号住居址の西側至近、約1.5mの所に位置している。1辺約3.2mの方形に近い竪穴住居址であって、床面積は約10.3m²である。壁面の高さは北・西・南・の3壁は約15cmと比較的高いが、東壁は3.8cmと低く、その東南隅は南壁端とともに消滅していく確認できなかった。

床面に3箇のピットが確認されたが、うち2箇は南壁に接して設けられている。一つは上面の径約70cm、底面径約60cm、深さ約22cmを測り、東側のピットは上面の長径約100cm短径約80cm、底面は長径75cm短径55cm、深さ31cmで、共に不整形のピットである。この2つのピットはこの住居址に付属する貯蔵穴ではなかろうかと推察され、東側のピットからは高環形土器、甕形土器が共に破損した状態で出土した。第3のピットは床面の

第6図 第3号住居址実測図



ほぼ中央部付近にあって、上面径約60cm、深さ11cmの不整円形を呈している。このピットの底部には灰層の堆積が認められたが、焼土については確認できず、このピットが炉址であるか否かの断定は困難であった。

この住居址に伴なう遺物は床面の南西隅に集中的に堆積していたが、それらの遺物は壺・鉢・高環形土器などであって、そのほとんどが破損した状態で出土した。

壺形土器 1

胴部以上を欠ぐが、底部径9.2cmの平底土器である。底部から胴部へ大きく開いてたちあがっている。底部に近く、細い刷毛目が縱に施されている。胎土には細砂粒を含み、焼成良好で、色調はやや明るい褐色である。

鉢形土器 2

口縁径20.7cm、高さ12.3cmの深鉢形土器である。口縁部は逆L字型に大きく外側に開き、頭部の内側には稜を有する。底部は安定性のある平底である。胴部から底部にかけて細線の刷毛目痕が部分的に残っている。胎土には砂粒を含み、焼成粗く、内外ともに

褐色を呈する。

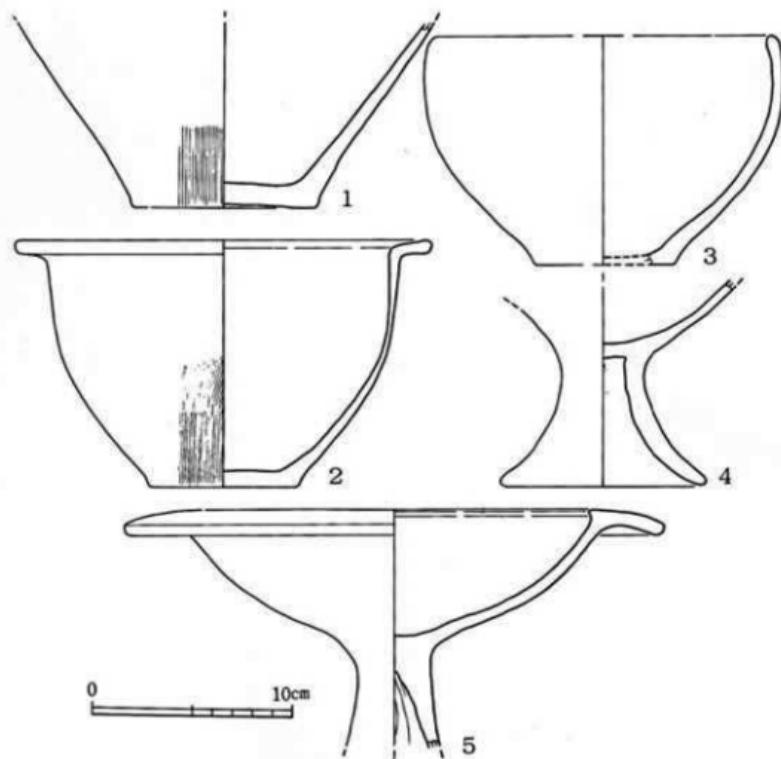
鉢形土器 3

口縁径16.7cm、高さ11.4cmで比較的小形である。全体的にやや肉厚の器体であって、口縁部は僅かばかり内側が湾曲しながら、垂直に立ち上がり、底部は平底である。胎土には細砂粒を含み、赤褐色を呈するが、内側はやや暗い赤褐色である。焼成は粗い。

高環形土器 4

坏部の上半を欠いているが、脚底径10.3cm、脚部高6.4cmである。脚部は肉厚で外側に大きく湾曲した安定性のある器形である。脚部内側には指圧痕が認められる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内外ともに淡褐色を呈する。

第7図 第3号住居址出土土器実測図



高環形土器 5

床面南西隅から、倒置の状態で発見されたが、脚部の大半を欠失している。

环部は口径27cmの比較的大型である。环は皿形をなし、口縁部はやや広く、平坦で外に向ってゆるやかに傾斜している。焼成は堅緻ではなく、内外ともに器面の剥落が多いが、环部の内側には丹塗りの痕跡が認められる。色調はやや黄色味をおびた赤褐色である。

〔4号住居址〕

2号住居址の南方約25mに位置する。一辺約4.5mを測る方形の平面プランをもつ住居址であると推定される。現地表面からの深さは64cmである。この間における堆積土は表土22cm、黒褐色土32cm、暗褐色土10cm程度から成っている。

この住居址は、その大半が造成地外にはみ出していたため、住居址の全貌を確認することはできなかった。検出された遺構の範囲内では炉址および柱穴については不明であり、遺物の出土も認められなかった。

(3) C区の住居址

天満宮の境内に接する地域であって、社殿が西面し西方へ向って細い参道が通じているが、その参道に接する南側および境内の南側一帯をC区とした。そのため、この地区は限定された局部の調査であって、遺構は参道および境内の方へと拡がっていることが確認され、その全貌を明らかにすることができなかった。このC区では、5・6・7号の3戸の住居址が確認された。

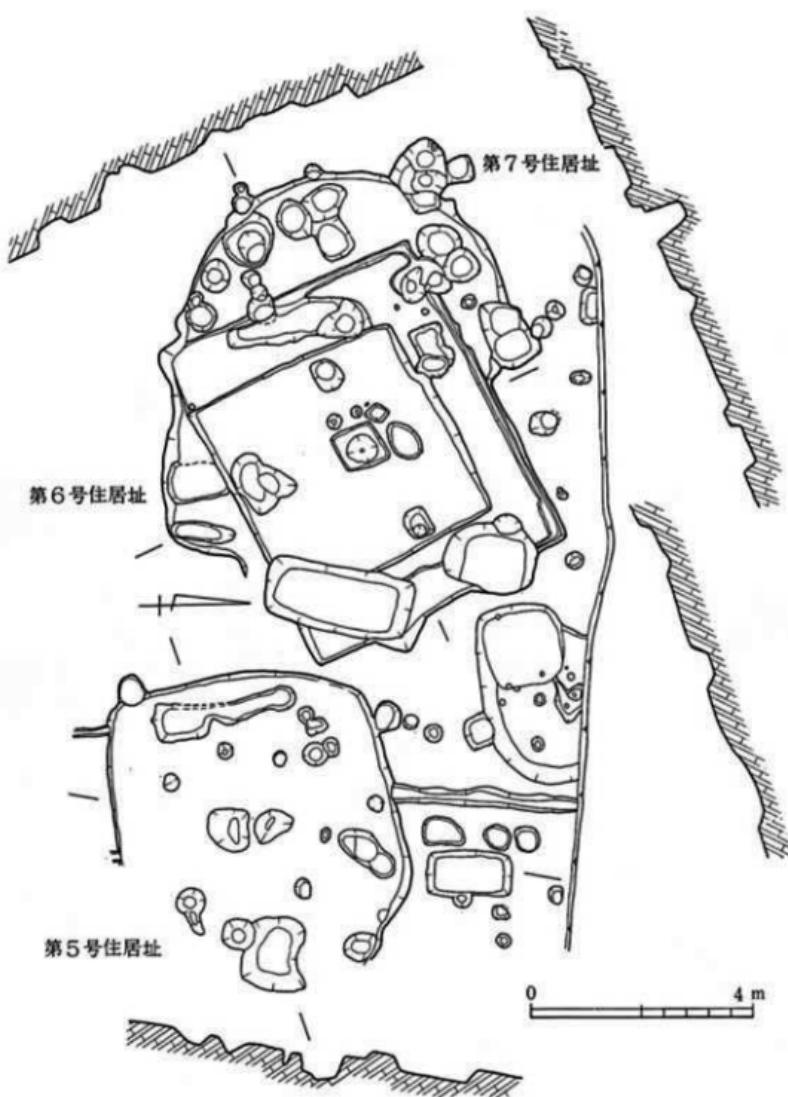
〔5号住居址〕

天満宮の参道より4m余り南に位置している住居址であって、1辺5m余りの隅丸方形か、または、変形5角形プランの竪穴式住居址ではないかと考えられるが、東側が神社の境内にかかるため未調査で、全体のプランは明らかでない。壁面の高さは、15cm内外であって、床面は大体平坦であるが、床面には大小多くのビットがあって、柱穴の配置については明らかにすることことができなかった。

この住居址の北側に接して、主軸を南北の方向においた152×84cmの長方形プランの深さ28cmの掘込みがあるが、これはその位置からみてこの5号住居址に付属する貯蔵穴であろうと推定される。この貯蔵穴の周囲には数個のビットがあり、特にこの貯蔵穴の西側80cmのところに、貯蔵穴の長軸線に平行して南北の方向に幅28cm、深さ12cmの小溝が設けられていて、5号住居址の壁面のところまでのびているのが注目される。

この小溝は、住居または貯蔵穴の排水溝としての機能を有する施設であろうとは考えられるが、北側が参道にかかっているためその全貌は明らかでなく、どの施設に伴の

第8図 第5・6・7号住居址実測図



う排水溝であるのか確認することができなかった。

5号住居址および貯蔵穴の内部、またはその周辺から出土した遺物は、弥生時代中期の小形の腹形土器を主体とする土器片の他に、黒曜石の剝片などが出土した。

この出土した遺物かやみて、この5号住居址は、弥生時代の中期に属するものであろうと推定される。

〔6号住居址〕

5号住居址の西側に接続している住居址であって、整然とした方形プランの堅穴式住居址である。1辺が 5×6.3 mの長方形で、床面の深さは28~40cm余りである。北と西の両壁面の内側には、壁面にそつて幅12cm、深さ8cm余りの排水溝が設けられている。床のほぼ中央に、1辺が80cm前後で、深さ20cm余りの方形プランをなす炉址がある。この住居址についても、柱穴を確認することはできなかった。

この6号住居址の西北に接して円形プランが約半分ほど残存している。径約5.8m、壁面の高さ16cm余りの堅穴住居址（第7号住居址）ではないかと考えられるが、この円形プランの堅穴住居址を破壊して、その上に重複して営まれているのが、この6号住居址である。そこで、この6号住居址が営まれる以前にも、この地には先行する住居が存在していたことが当然推定されるのである。

次に6号住居址には、東・北・西の3方の壁面に沿うて、幅1.2~1m、床面からの高さ20cm余りのベッドがコ字状に整然と設けられている。本県内で発見されたベッドを有する住居址については、すでに鳥栖市の本川原遺跡の6号住居址について報告されており（昭和50年2月28日発行「本川原遺跡——第2次調査」）、本遺跡の北に接続している中原中学校敷地内からも発見されたといわれ、本遺跡の2号住居址にもベッド状の遺構が認められるので、今後類例が次第に増加することが期待されるのであるが、現在の時点においてはこの6号住居址のように整然としたベッド状遺構を有するものは、県内では他に類例が知られていない。

6号住居址の東南隅に、壁面とベッドを切って、 2.6×1.2 mの長方形を呈する深さ1.5m余りの貯蔵穴が設けられており、さらにこの貯蔵穴の北側にも壁面とベッドを切って、 1.7×1.3 mの不整形を呈する深さ1.3mの掘込みがあるが、これは底部の東側が膨らんだ袋状の掘込みである。この他にもベッド上に比較的に浅い掘込みが2か所に存在している。これらの掘込みが、もしこの住居址に付属するものであるとすれば、ベッドはその本来の機能をほとんど失なってしまうことになる。

東側に位置する2か所の掘込みは、大きさや形式などからみて、貯蔵穴と推定してほんは誤りではなかろうと考えられ、その内部からは相当多くの土器片が出土している。この貯蔵穴内出土の土器は、その大部分が弥生式土器であって、住居址の床面からの出土

土器が土師器であるのと、全く異なっているのが注目される。そこでこの2か所の貯蔵穴は、当初ここに営まれた円形プランの住居址に付属するものではないかと推定され、位置的にみても円形プランの住居址の外側至近の場所であって、矛盾が感じられない。おそらく円形プランの住居址があった場所に、方形プランの住居を営むに当って、貯蔵穴などを埋め戻して整地し、新しいプランの住居を建てたのではないかと推定される。

この6号住居址は、円形プランをもつ弥生時代の住居址の一部を壊して整地し、その場所に重複して営まれている方形プランの古墳時代の住居址である。そのために、周囲には相当多くのピットが残存しているが、それらの性格は明らかでなく、また、出土する土器も弥生式土器と土師器との2種類となっている。

土器の出土は比較的に多かったが、ほとんど破片のみで、その器形を明らかにすることが可能なものは、少なかった。

1 製形土器（第7号）

貯蔵穴内出土の小形甕の口縁部であって、胴部は僅かばかり膨らみを持っているが、ほぼ垂直に近い立上りで、胴部と直角に口縁部が外へ開いている。胴部の下方に刷毛目が縱に施され、内側は横なでに整形されている。淡褐色を呈し、胎土には砂粒を含んではいるが、比較的によく精選されている。

2 製形土器（第7号）

貯蔵穴内出土の小形甕の口縁部である。胴部は僅かばかり外膨らみで立上り、胴部と直角に口縁部が外へ張り出している。口縁部の下に刷毛目が縱に通じ、胴部には1条の凸帯が付けられていて、口縁部および凸帯には刻目が付されている。褐色を呈し、胎土は砂粒を含有していて、焼成は余り良くない。

3 製形土器（第7号）

貯蔵穴内出土であって、小形の甕の口縁部であろうと推定される。ほぼ垂直に胴部は立上っているが、頸部が相當に強くしまり、口縁部は胴部と直角に内外の両方へ張り出している。淡褐色を呈し、砂粒を含み、焼成は良くない。

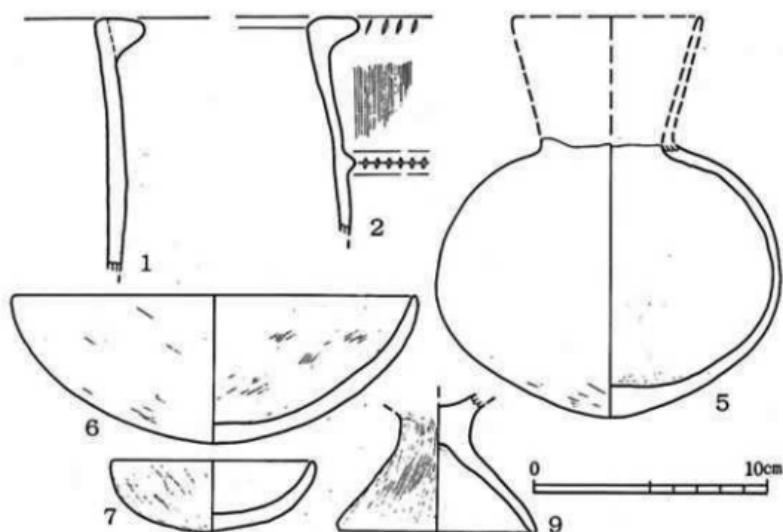
4 製形土器（第7号）

貯蔵穴内出土の小形甕の底部である。上げ底となっていて、外側は垂直に立上り、それから胴部へ向かって斜めにのびている。刷毛目が縱に通じ、内部には煤が付着している。褐色を呈し、胎土には砂粒を含んではいるが、焼成は比較的に良好である。

5 壺形土器（第6号）

住居址の床面出土の壺であるが、おそらく有頭壺であろうと推定される。最大部径14.8cm、胴部の高さ12.8cmの球状を呈し、やや尖底に近い丸底である。上部は淡褐色を呈しているが、下半部は灰褐色または黒褐色を呈し、中央部付近には研磨のあとをとどめ

第9図 第6・7号住居址出土土器実測図



ている。胎土には砂粒を含有しているが、焼成は比較的に良好である。

6 环形土器（第6号）

床面出土で、径17.4cm、高さ6.5cm、丸底の環である。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を含んでいるが、比較的よく精選されている。焼成は悪く、表面が相当に剥離しつつあり、1部に斜めに走る刷毛目のあとが認められる。

7 环形土器（第6号）

ベッド上から出土した径8.7cm、高さ3.2cmの丸底の小形の环である。黒褐色を呈するが、内部の1部には淡褐色のところもあり、胎土には手捏的手法のあとが認められる。

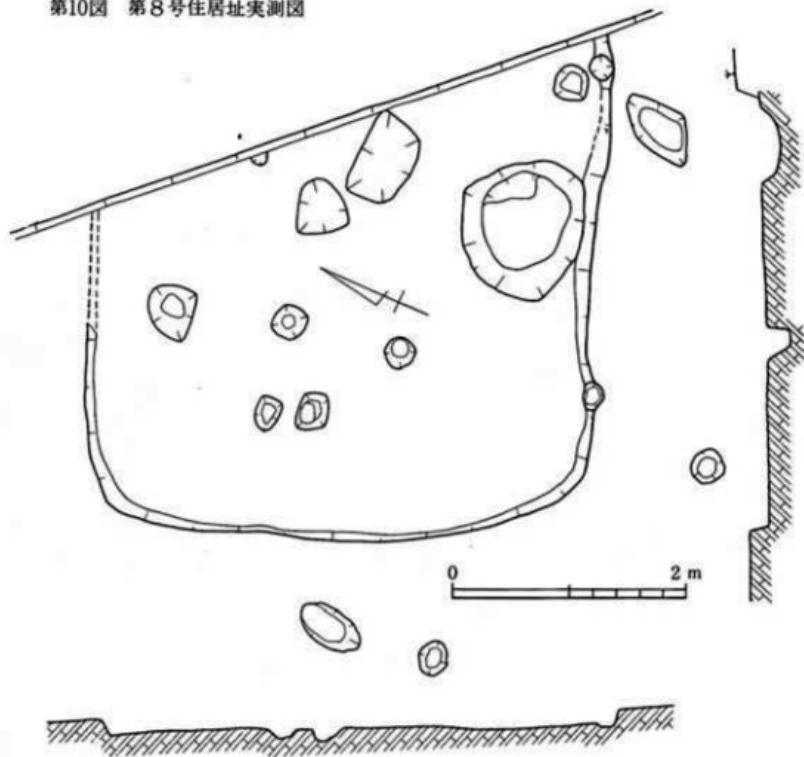
8 高环形土器（第6号）

ベッド上から出土した高环の脚部である。环部および脚の先端部が欠失しているが、脚部の高さ13cm、脚部のひろがり径13cm余りと推定され、安定感のある脚部である。褐色、一部は淡褐色を呈し、胎土は比較的よく精選され、焼成も良好である。刷毛目のあとが一部に残っており、下方には3か所に小円孔が穿たれている。

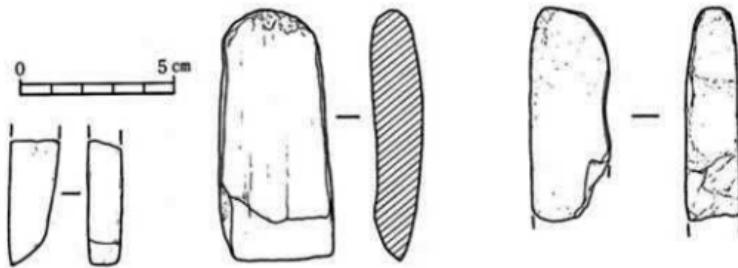
9 土器脚部（第6号）

住居址の床面出土で、土器の主体部は欠失し、脚部のみである。脚の裾部の径8.5cm、高さ約5cmで、上部から裾部へ「ハ」字形に直線的に開いている。褐色または淡褐色を

第10図 第8号住居址実測図



第11図 姫方原遺跡出土石器実測図



呈し、砂粒を僅かばかり含有しているが、胎土は比較的によく精選されていて、焼成もまた良好である。外側には、刷毛目が縱に通じている。この脚部は、高坏の脚部というよりも盤か深鉢形土器の台ではないかと考えられる。

〔注〕 1～4 弥生式土器（第7号址貯蔵穴出土） 5～9 土師器（第6号住居址出土）

なお、貯蔵穴内からは、壺形土器片や黒曜石剝片10数個なども出土している。

〔8号住居址〕

8号住居址は、5・6号住居址の南方やや東寄りで、他とは孤立した状態のところに位置している。北側の約半分は、天満宮の境内にかかっているため未調査であって、住居址の全貌は判明していない。判明している部分の1辺の長さは約4.3mであって、隅丸方のプランをもつ住居址である。

壁面の高さは20cm前後で、床面は平坦である。床面には大小いくつかのビットがあるが、その性格は明らかでなく、また柱穴も不明である。壁面に接して10.6×1.2m余りの円形プランを持つ比較的大形の掘込みがあるが、深さが僅か25cm前後にすぎず、貯蔵穴とすることは困難ではないかと考えられる。

この住居址からの出土遺物は、極めて少なく、弥生中期後半末の形式をもつ鉢形土器片のみであった。この出土遺物からみて、この8号住居址は弥生中期後半末ごろのものであろうと推定される。

〔4〕 D区の住居址

方形周溝墓の東側斜面をD区として調査を進めた。その結果、住居址3・貯蔵庫2が確認された。またこの他大小のビットが多量に発見されたが性格不明のものであった。

〔9号住居址〕

方形周溝墓の東斜面約15mの地点に、長辺3.8m・短辺2.6mを測る隅丸長方形を呈する第9号住居址がある。この住居址の東北隅に直径90cm・深さ約13cmの円形状の凹が認められる。

この住居址の東壁に接して一辺約1.7mを測る略正方形のプランを呈し、深さ約30cmをもつ貯蔵庫と推定されるものがある（第1号貯蔵庫）。この貯蔵庫の南壁を切る穴および北壁に接する不整形土壙は、この住居址および貯蔵庫に係る1次的なものとは考えられない。

〔第2号貯蔵庫〕

第9号住居址の西方6m地点にこの第2号貯蔵庫と推定されるものが位置する。長辺1.55m・短辺1.2mの方形プランをもち、船底状の断面をもっている。

この周囲5カ所に上面径40cm・底面径20cm・深さ30cm程度を測るビットがあるがこれ

は、この貯蔵庫の屋根を支える柱穴として把握されるのではないだろうか。

この貯蔵庫からも何ら遺物を検出できなかった。また、これの西北隅は不明土壌のために破壊されている。

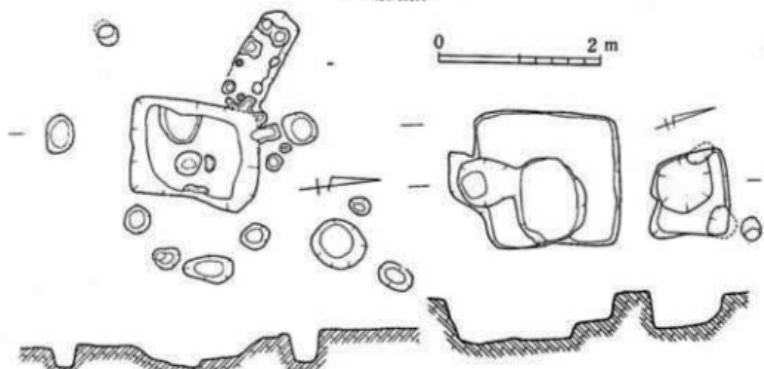
〔10号住居址〕

第9号住居址の東15mに第10号住居址がある。この住居址は壁面の破壊がはげし

第12図 第9号住居址実測図



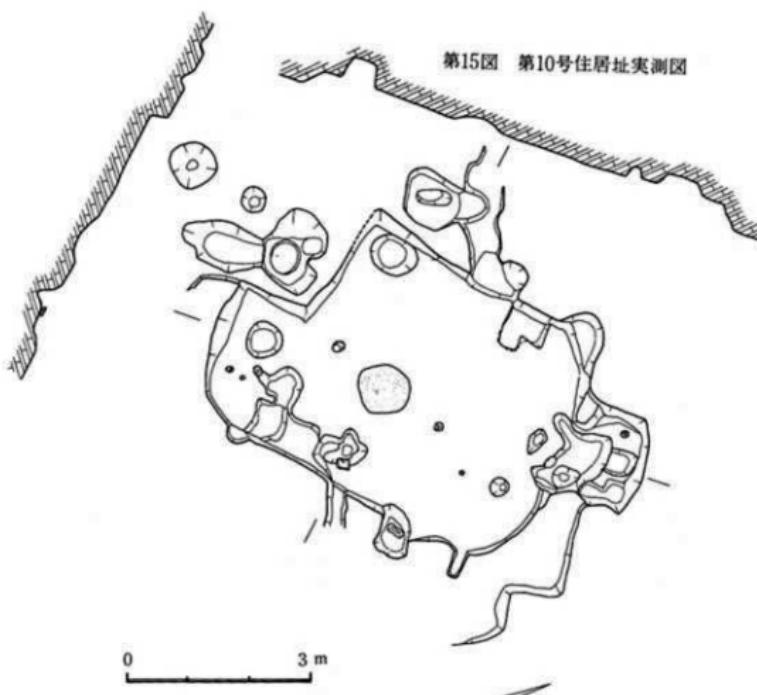
0 2 m



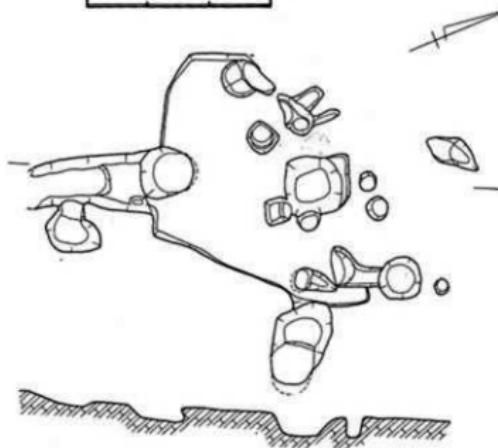
第14図 第2号貯蔵庫実測図

第13図 第1号貯蔵庫実測図

第15図 第10号住居址実測図



0 3 m



第16図 第11号住居址実測図

いが、長辺6m・短辺4.1mの隅丸長方形プランをもつものと推定される。この住居址の南西隅には、長さ2m・幅1mのベッドが設けられている。

この住居址の中央やや東寄りに直径80cmの円形状のくぼみがあり、灰および焼土が認められるところから炉が設けられていたことが推定される。

また、床の全面から土器が完形または破壊した状態で埋置されていた。約40個分の甕・壺・鉢・高環形土器・支脚形土製品などであって、意図的に破棄した状態ではないことが認められた。

甕形土器 1

口縁部径27cm・高さ28cm。口辺部は肩部から外側へく字状に鋭く湾曲している。口縁端は丸く整形している。胴の上部にや、張りが見られる。胎土に砂粒を含み良好な焼成であって褐色を呈する。器外は口辺部を除く全面に斜位の刷毛目、器内の胴部から底部にかけて斜行する刷毛目がある。また、器外の肩から胴部にかけて全面に煤の附着が見られる。

甕形土器 2

口縁径24.2cm・高さ23cm。口辺部はくの字状に湾曲し口縁端はやや下方に垂れながら丸く整形されている。胎土に多くの砂粒を含み赤褐色を呈する。器外には斜位の刷毛目が所々に認められる。

甕形土器 3

口縁部径24.5cm・高さ22.3cm。口辺部の特徴は2と同様である。器外の肩から胴部には縱に近い斜位の刷毛目、胴下部は斜行・底部は縱の極くこまかい刷毛目を付している。また、器内頭部に米粒大の刻目を2個附している。

甕形土器 4

口縁部径10.1cm・高さ10.6cmを測る極小形の甕形土器である。口辺部はくの字状に湾曲し口縁部は水平となり口縁端は丸く整形している。器の内外とも指で撫でて調整している。精選された胎土で焼成も良く暗灰色を呈する。

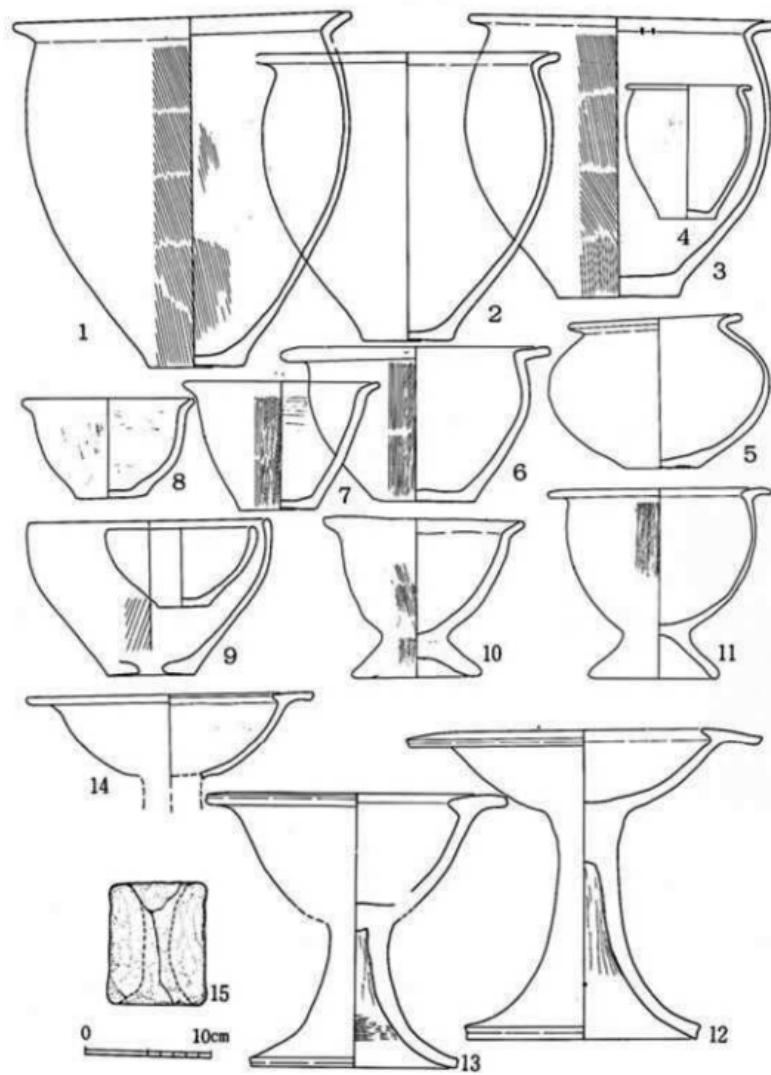
甕形土器 5

口縁部径13.8cm・高さ12cm。くの字に鋭く湾曲する口辺部、胴部が張って玉葱状を呈する器形である。胎土は精選された粘土であって焼成良好である。器の外側の胴部より下方には箒による調整がみられ、内側は撫であげる手法で調整し、最後に口縁部から底部にかける全面に丹彩を施して仕上げている。

鉢形土器 6

口縁部径21.5cm・高さ12.3cm。口辺部はくの字状を呈するが口縁の立ち上がりが少ない。や、胴張りのある鉢形土器である。器の外面には縦位の刷毛目、内面の頭部は横撫

第17図 第10号住居址出土土器実測図



で、胴部より下方は撫であげて調整している。砂粒を含む胎土であって焼成も良く褐色を呈する。

鉢形土器 7

口縁部径15.6cm・高さ10.3cm。くの字状に外反する口縁をもち、頭部から底部にかけて直線的にせばまる胴部であって平底である。器の外面は継位の刷毛目、内面は横に走る箒の調整痕がある。砂粒を含む胎土であるが、焼成は良好であり褐色を呈する。

鉢形土器 8

口縁部径13.7cm・高さ7cm。くの字状の口縁を有し、胴部から内側にカーブして底部に至る形態である。器の内外面とも箒による調整が施されている。胎土に砂粒を含むが焼成は良く淡褐色を呈する。

鉢形土器 9

口縁部径19cm・高さ12.2cm。やや内側に喰い込む口縁をもち、胴部から底部にかけて直線的に延び平底に至る形をもっている。器の内および外側の口辺部には横撫で、器外の胴部から下方には斜位の刷毛目状の調整痕が残されている。砂粒を含む胎土であって焼成は良く赤褐色を呈する。

この土器の底部中央には径1.8cmの孔が外側から穿孔されており、瓶としての機能を有している。

台付鉢形土器 10

口縁部径16cm・高さ12.5cm。くの字状に外に聞く口縁部から、ややカーブ気味にせばまって底部に至る器形をもつ鉢形土器に、台を付して安定させている。胎土に砂粒を含み焼成や、良といえよう。

脚付鉢形土器 11

口縁部径17.8cm・高さ15cm。鶴の頭部を起想する口辺部を有し、球状に張り出た胴部をもつ鉢形土器にラッパ状に聞いた台を付している。胎土にやや多量の砂粒を含み焼成は良く褐色を呈する。

高環形土器 12

口縁部径28.3cm・高さ24.6cm。口縁外部が下方に垂れ深い環形を呈し、ラッパ状に聞く台部が強調されている。胎土に砂粒を含んでおり焼成も良く褐色を呈する。

支脚形土製品 15

直径6.5cm・高さ9.5cmを測り円筒状を呈するものであって手捏である。胎土に砂粒を含み焼成は良好であって褐色である。

これらの土器群を「姫方原II式土器」と呼称することとし、弥生時代中期終末期に編年されるものであろうと考えられる。

〔11号住居址〕

第10号住居址の南東3mの地点に第11号住居址がある。この住居址は、削平と大小のピットによって破壊され、わずかに壁面をとどめているに過ぎない。南壁3m・東壁3.7m・北壁は不明であるが3.5m程度、西壁も不明で約3m程度が推定される。この住居址の平面プランは台形状であろうと考えられる。

この住居址の中央部や、北側寄りに直径40cmの三日月形に焼土が残存しているのでここに炉が設けられていたものと考えられる。

この住居址からは遺物を検出できなかった。

4 方形周溝墓

姫方原遺跡における今時の調査対象となった区域の西南の隅——姫方段丘の尾根上に方形周溝墓と推定される1基が存在する。

この方形周溝墓は一部分が調査されたのみであるので全貌を明らかにすることはでき

第18図 姫方原方形周溝墓実測図



ない。調査された時点ではこの方形周溝墓に盛土は存在せず、開墾等による削平があったものと考えられる。方形台状部の東北部約80m以内には内部主体を確認することができなかった。将来の調査に期待されるところである。

(1) 周溝

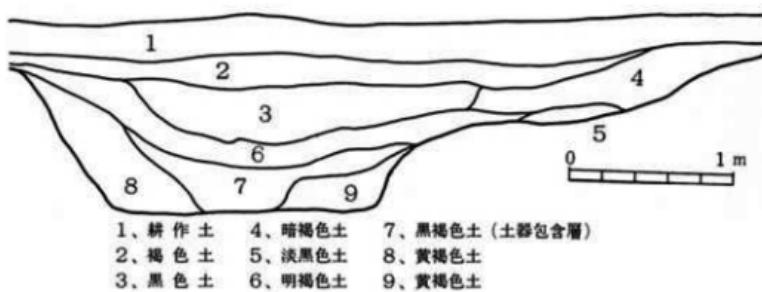
この方形周溝墓は、北溝の一部——東側より9mが調査されこれは西へ向って延びるものと考えられる。東溝は北溝との曲部から南へ14.3mが調査され南へ延びるものと考えられるが、周溝の全貌を知ることはできない。

北溝は上面幅1.8m・底面幅1.5m・深さ40cm程度を測り、底面は平坦であって直線的に穿たれている。

東溝は、曲部で上面幅2.0m・底面幅1.8m・深さ約40cmを測り、南下するに従って上面幅が広くなり、深さも増してくるのであり、曲部より14m地点では上面幅2.5m底面幅1.6m・深さ95cmを測り、床面は平である。北溝が直線的に延びているのに対して、東溝はやや東側に弧を描きながら南下していることは注目される。

また、曲部は外周壁で約100度の屈曲をなしていることも特徴であり、溝の断面においても平床を呈するなど特色をもっている。

第19図 方形周溝墓東溝断面図



(2) 遺物

台状部からは何ら遺物は検出されなかった。周溝内の床面からはおびただしい土器群が、完形あるいは破壊され投棄された状態で出土した。

これらの土器群は、北溝では曲部から7mの範囲内であってそれより西へは存在せず、また、東溝では曲部から12mの範囲の中に集中している。また、これらの土器群は、曲部の南・西へ4mの範囲内に集中している傾向にあることは注目される。

斐形土器 1

口辺部はくの字状であって口縁部はやや外側に開いている。肩部にやや張りがみられ

丸底である。器外底部には縦・斜位の刷毛目痕が残り、器内は箒で調整されている。砂粒を含むが胎土は良く焼成も良好で褐色を呈する。底部には外側からの穿孔（径6mm）がある。口縁部径13.7cm・高さ16.3cm。

している。この刻目は口縁上面にも付している。この凸帯より上部の口辺には縦に走る刷毛目痕がある。凸帯より下部の肩部には荒い節目状の条痕が横に走っている。器体の内側には縦横の刷毛目痕がある。胎土には微粒の砂を含み焼成は良好であって褐色を呈する。

壺形土器 2

大形の壺形土器であって胴部以下を欠いている。ゆるやかなくの字状を呈する口辺部をもち、頭部に断面台形状の凸帯を張りつけその上面には斜めに走る刻目を付して装飾している。この刻目は口縁上面にも付している。この凸帯より上部の口辺には縦に走る刷毛目痕がある。凸帯より下部の肩部には荒い節目状の条痕が横に走っている。器体の内側には縦横の刷毛目痕がある。胎土には微粒の砂を含み焼成は良好であって褐色を呈する。

壺形土器 3

胴部の最大径が中央よりや、上位にあって、球状を呈する器体である。口辺部はくの字状に外側に反るが、稜線から立ち上がる口縁を形成している。肩部に斜位の刷毛目、胴部には縦の刷毛目痕を残している。器体の内側の頭部より下の全面には箒による調整痕がある。口縁径16.2cm。

壺形土器 5

口縁部径21.6cm・高さ42cm。卵形を呈する器体であって、ラッパ状に聞く口辺部をもち底部は尖底状を呈している。口縁部には刻目を施し頭部に凸帯を付して装飾している。口辺部は縦の刷毛目、胴部は斜位の刷毛目痕を残している。微粒の砂を含む精選された胎土であって焼成も良く褐色を呈する。

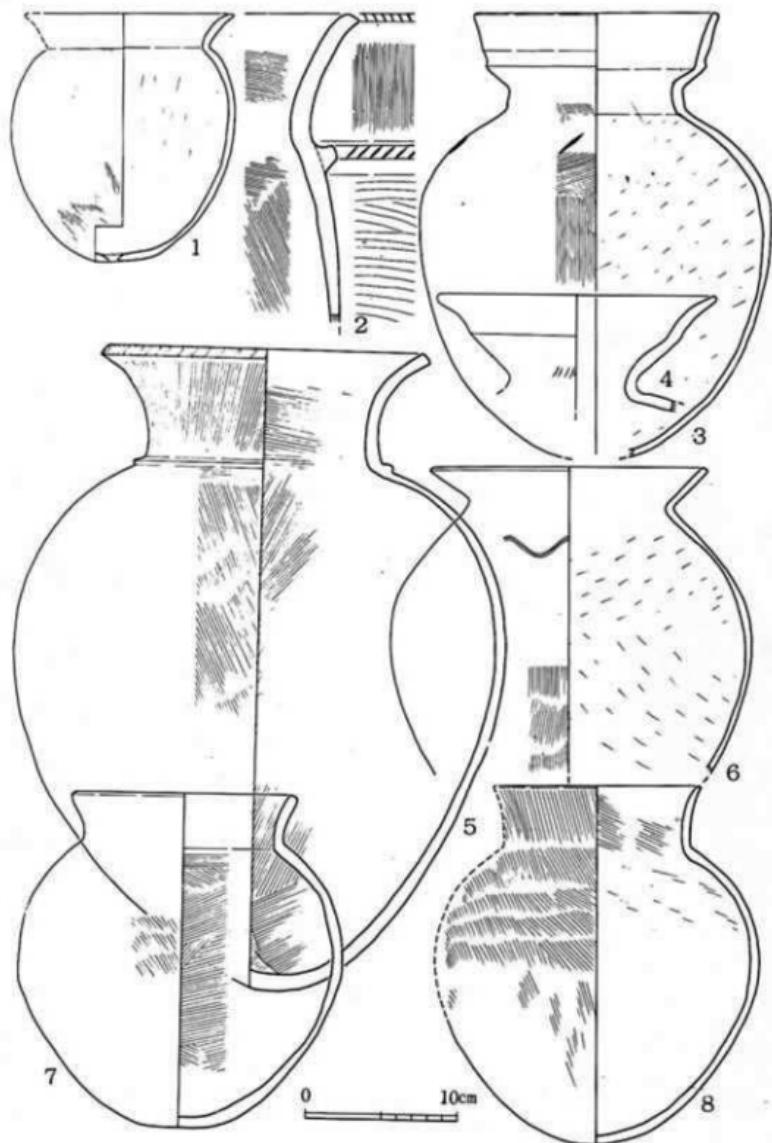
壺形土器 6

口縁径18.2cm。底部を欠いているが球状の器体にくの字状に鋭く外反する口縁を付している。肩部には数条からなる波状文が走り、胴部には縦位の刷毛目痕が残されている。器体の内面はなで上げて調整している。微粒の砂を含む胎土であって焼成もよく暗褐色を呈する。

壺形土器 7

口縁部径14.8cm・高さ21.9cm。球形の器体に、立ち上がりながらや、外反する口辺部をもつ土器である。器体の内外には横・斜位の刷毛目痕がある。微粒の砂を含む精選された胎土であって焼成も良く褐色を呈する。

第20図 方形周溝墓出土遺物実測図(1)



壺形土器 11

口縁部径10.7cm・高さ9.7cm。球状の器体にわずかに外反する短かい口辺部をもつてゐる。器外部および口辺内部は擦による調整、内側は刷毛による調整がなされている。砂粒を含む胎土であって焼成も良く灰褐色を呈する。

脚付壺形 15

口縁部径16.3cm・高さ29cm。脚が付された壺形土器であって、や、外側に開く短かい口辺、ほとんど張りが見られない長い胴部、そしてラッパ状に開く脚を付している。器外の全面に刷毛による調整がなされ、胴部と脚下端に叩き手による成形痕が認められる。器内には部分的に刷毛目痕が残されている。胎土には砂粒を含むが良好であり焼成も良く褐色を呈する。

脚付壺形土器 16

口縁部径22.2cm・高さ22.2cm。くの字状に外方に開く口辺部からや、張りをみせる胴部、これにラッパ状の脚を付している。

壺形土器 17

口縁部径13.7cm・高さ6.8cm。や、深みのある壺部で口縁部はくの字状に外開する。口縁部の外面は斜位の刷毛目、内面は横に走る刷毛目で調整している。胴部は箒による粗雑な調整痕をとどめている。胎土良好で細砂粒を含み焼成はよく淡い褐色を呈する。

鉢形土器 20

口縁部径19cm・高さ8.3cm。細粒の砂を含む胎土で器の外面は箒による調整、内面は刷毛による調整痕をもち、口縁部は内外ともに撫でて調整している。淡褐色を呈する。

鉢形土器 21

口縁部径15.3cm・高さ9.7cm。細粒の砂を含む良好な胎土であって、器外面は継位、内面は斜位乱れの刷毛目痕を有する。焼成する前に底部を穿孔している。孔は直径6mmであって円形である。色調は明るい褐色を呈する。

鉢形土器 22

口縁部径8.7cm・高さ6.8cm。良好な胎土に細粒の砂を含むもので焼成も良く淡褐色を呈する。器内外とも横撫でによる調整が施されている。

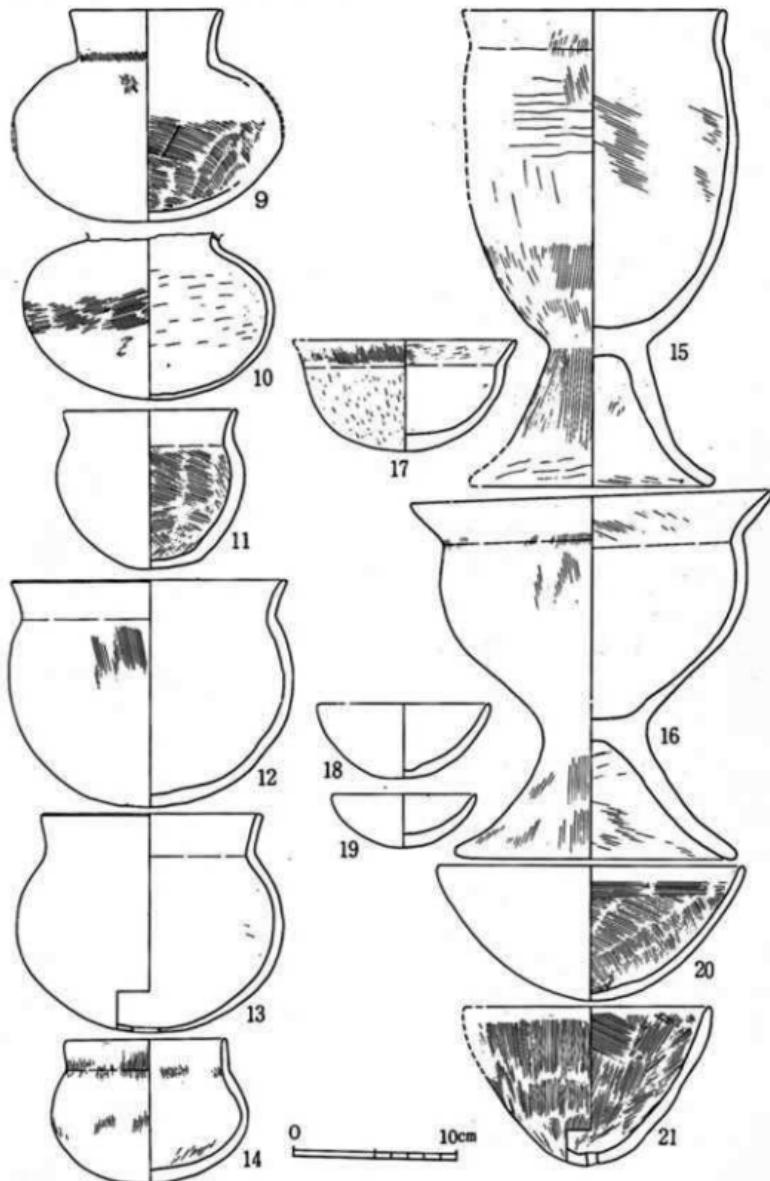
鉢形土器 23

口縁部径11.3cm・高さ8cm、良好な胎土に細粒の砂を含み焼成も良く暗褐色を呈する。器の内外とも指圧による調整が施され、内面の口辺部は撫で調整がなされている。

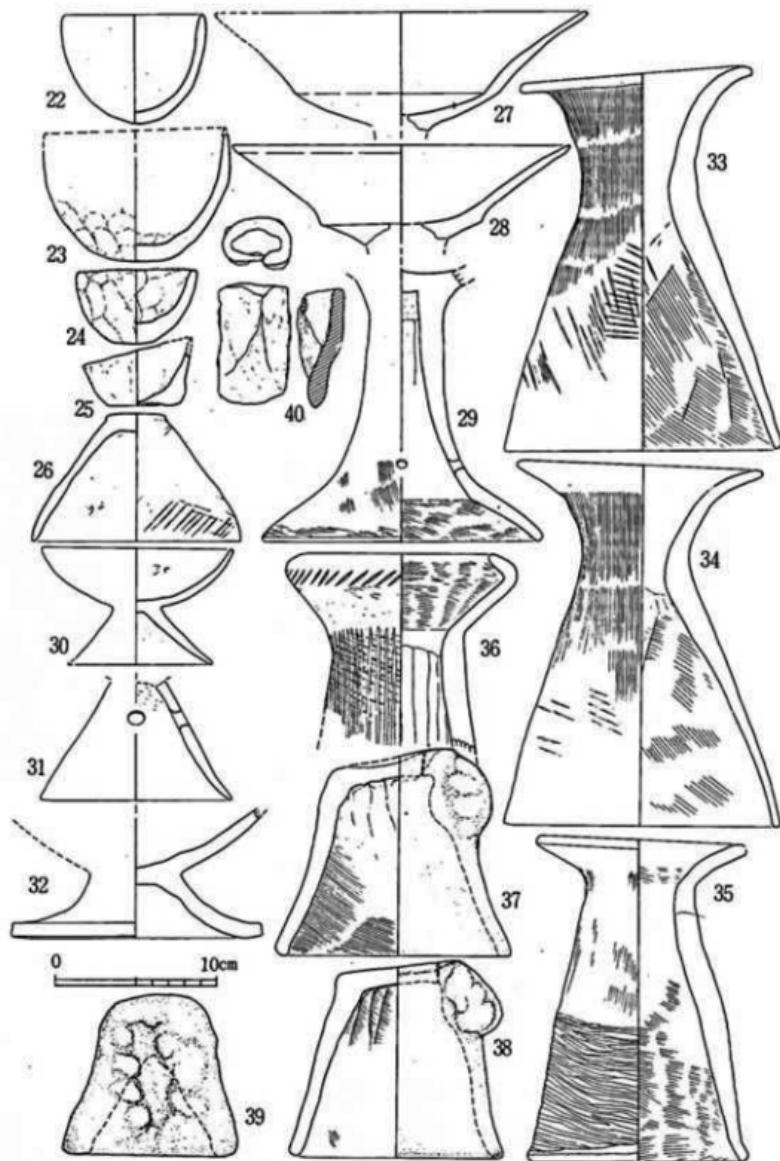
鉢形土器 24

口縁部径7.4cm・高さ4.5cm。手捏によるものであって、器の内外に指圧痕をとどめている。

第21図 方形周溝墓出土遺物実測図(2)



第22図 方形周溝墓出土遺物実測図(3)



鉢形土器 26

口縁部径14.9cm・高さ7.9cm。器の外面には、斜位の叩目痕が認められる。胎土に細粒の砂を含み焼成は良く黒褐色を呈する。

高環形土器 28

口縁部径20.9cm。良好な胎土に細粒の砂を比較的多く含み、焼成は良く褐色を呈する。脚部は欠損している。环部の内面に箒による調整痕が一部に認められる。环部に棱をもち外方に開き皿形を呈する。

器台形土器 33

高さ23.8cm。良好な胎土に細粒の砂を含み焼成も良く褐色を呈する。胴部の上端からラッパ状に聞く受器部、また底部は円錐状を呈する。胴部の上部は継位の刷毛目、下部は叩き目痕をもちその後箒で調整している。器の内面上部は撫で、下部は箒による斜位の調整痕をもっている。

器台形土器 37

高さ12.8cm。逆コップ状を呈し、上側面に把手をつくっている。この把手は両方から指で圧して造りだしている。またこの把手寄り上面に径1mmの孔が穿たれている。器の内面上部は指で撫でるというより指圧をづらしながら調整するという手法、下部は斜位の刷毛目痕を有している。

鉄 斧 40

全長7.5cm・幅4.4cmを測り略長方形を呈し刃部は弧状を呈する。上部は鉄板を両側から折り上げて袋状にして茎をつくっている。

まとめ

現在、佐賀県内には、佐賀平野東部山麓に4ヵ所の方形周溝墓が確認されている。

中原町姫方方形周溝墓は、上面の削平がはげしくその原状は不明である。現状における溝はほぼ方形を呈しU字状断面を有する。溝内から出土する土器は南溝中央部から壺形土器片かと推定される破片が1点あるのみであって皆無に等しい。また、内部主体も確認することはできなかった。

鳥栖市本川原方形周溝墓は2基があり第1号墓は、陸橋を東に向けて築造されており方形台状部は南北13.4m・東西14.7m、周溝上面最大幅2.5mであり、その断面はV字状を呈する。南溝から東溝にカーブする地点に壺形土器と二重口縁を有す壺形土器の口縁部が出土した。内部主体は土壇墓である。

上峰村堤方形周溝は昭和49年県教委による予備調査によって確認されたものでその実

態は未だ明らかでない。

姫方原方形周溝墓は削平による破壊と未調査区域を残しているため、これを完全に把握することはできないが、現在までに知られている方形周溝墓とは異った特徴をいくつか見出すことができる。

即ち、周溝の床が平面であってその底面幅が1.5mを越えていることであろう。またこの周溝の曲部を中心に多数の土器が完形や壊れた状態で出土し、壺・鉢形土器の底部は穿孔した状態で埋置されていた。これら周溝内から出土した土器群を「姫方原Ⅲ式土器」と呼称する。この姫方原Ⅲ式土器は鳥栖市本川原遺跡⁽³⁾の本川原Ⅰ式土器併行と考えられるのであり、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭に位置づけられるであろう。

したがって、県内において確認されている方形周溝墓はまず姫方原方形周溝墓が築造され、その後本川原方形周溝墓第1号墓が方形周溝墓として完成された形をもって築造されたものと推定される。姫方原方形周溝墓は、姫方原方形周溝墓と本川原方形周溝墓第1号墓の形成されるその中間に位置づけられるものと考えられる。なお、方形周溝墓の始源を考察する段階で、小城町晴田小学校庭遺跡にみられる孤状溝墓の存在を無視することはできないように考えられる。⁽⁴⁾

(1)木下 巧 「姫方原方形周溝墓」 姫方原遺跡所収 佐賀県文化財調査報告書第30集

(2)木下 巧 「本川原遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第26集

(3)木下 巧 「本川原遺跡=第2次調査=」 佐賀県文化財調査報告書第32集

(4)木下 巧 「孤状溝墓」 小城町史所収

IV 総 括

三義基郡中原町の姫方低丘陵は、寒水川によって形成された河岸段丘であって、洪積層の花崗岩質の砂礫土壌から成り立っている。この低段丘上には、弥生時代から古墳時代にわたる遺跡が濃密に分布していて、この地方が農耕始源の弥生時代にすでに開発が相当に進んでいたことを物語っている。この地方の開発は、寒水川の水利に負うところが大きかったことが考えられるのであるが、一面においてはこの丘陵の北端が脊振山系の方へ谷あいとなって開けていて、この低段丘が東西南北の四方へ通ずるこの地方における交通上の一つの要となっている点も見落すことができないのではなかろうか。

この姫方段丘遺跡は、時代的に分類すれば弥生時代と古墳時代の遺跡、性格的な種別からみれば墳墓群と住居址群の遺構、と大別することができる。また、地域的に類別すると、長崎本線の線路を境として、北と南との2区に分類され、この2区を巨視的に概観すると、北区は墳墓群、南区は住居址群と性格づけることも可能であろう。しかし、両区ともに時代的にみた場合の遺構は重複していて、地区と遺構の性格とはほぼ一致しているが、それに時代分類までをかみ合せることは困難である。

本調査の対象となった姫方原遺跡は、姫方段丘の南部に位置していて、姫方段丘遺跡の南区に属し、弥生時代から古墳時代にかけての遺構が重複しており、性格的にみれば住居址群を主体とする遺跡であるが、住居址の他に方形周溝墓が1か所存在している。この遺跡についての調査結果を整理すると、概要次のとおりである。

1、住居址について

①立地と構成

住居址は、段丘の尾根付近から中腹にかけて分布しており、丘尾付近においては発見されていない。また、数戸ずつグループをなして点在しているが、1グループの戸数を明確に把握することはできなかった。

②規模と形式

住居址の1辺ないし直径は、すべて5m前後であって、特に注目されるような規模を有するものは発見されていない。

平面プランは、円形・隅丸方形・方形・不整形と変化に富んでいるが、この形式の変化は一面において時代差をも反映しているということも考慮されなければならない。不整形プランの中には、1号住居址・5号住居址のように多角形プランに近似しているものもあるが、本県内では新例の形式として注目されるものであろう。

③構造

調査を実施した住居址は、すべて竪穴式であった。カマドが設けられていた住居址は

なく、炉は床のほぼ中央に設けられているが、明確でない住居址もあった。

2号住居址と6号住居址とには、壁面に沿うて排水溝が設けられているが、この排水溝は地形が高くなっている部分にのみに限られていて、高处から雨水が住居内に侵入したものとの小溝で防ぐための施設であることを物語っている。

この遺跡の住居址の構造として特に注目されるのは、造り出しを付設したものと、ベッドを設けたものがある点であろう。

2号住居址と9号住居址とには、それぞれ壁面に接続して1か所ずつ造り出しが設けられている。2号住居址は、この造り出しの部分がベッドとなっているが、8号住居址についてはその造り出しの部分の機能については明らかでない。

ベッドを有する住居址の例は、鳥栖市本川原遺跡その他から発見されているが、この遺跡からも2号住居址と6号住居址にベッドが設けられていて、その事例が次第に増加しつつある。しかし、この6号住居址のように整然とベッドを構成しているのは、県内では他に類例を見ない。

6号住居址は、高处である北と西の両面に排水溝を、床の中央に方形の炉を設け、南側の日照りのよい部分を広間として開放し、他の3面にコ字状にベッドを設けているなど、極めて合理的な構造をとっているとともに、壁面・ベッド・炉とすべてを方形プランの中に整然とまとめているその構成は、古墳時代における完成された住居形式の一つとみるべきではなかろうか。

④貯蔵穴

この住居址群に付属する貯蔵穴は、方形または長方形の整然としたプランを有するものが多く、また、底部がひろがって袋状を呈するものもある。

⑤編年

6号住居址によってその1部が破壊されている円形プランの第7号住居址は、貯蔵穴内出土の遺物（姫方原I式土器）によって、弥生時代中期に属するものであろうと推定される。多久市牛田辺遺跡（「牛田辺遺跡」）和50年1月31日、多久市教育委員会発行）の弥生中期の住居址もまた円形プランであった点からみて、本県地方における弥生中期の住居址のプランは、円形を基本としているということができるようである。

1号住居址は、壁面の約半分が多角形を呈し、半分が円形であるところの不整形プランであり、5号住居址は隅丸方形かとも思われるが、一面においては五角形の要素を有する不整形プランの住居址である。1号や6号の住居址のように、多角的な不整形プランをもつ住居址は、出土する遺物からみて、弥生時代中期前半の住居址として把握されるのではないかと考えられる。

2号・8号・9号などの隅丸方形プラン、特に造り出しを有する8号・9号住居址は、

その出土遺物（姫方原II式土器）から弥生時代中期後半の住居址であろうと推定される。

ベッドの施設をもつ方形プランの6号住居址は、出土した土器形式（姫方原IV式土器）からみて、5世紀後半ごろに比定される古墳時代の住居址であろうと推定されるが、両壁面にベッドを設けた方形プランの鳥栖市本川原遺跡の6号住居址（「本川原遺跡第一第2次調査」昭和50年2月28日発行）、また、基山町伊勢山遺跡（「基山町伊勢山・鳥栖市永吉遺跡」昭和45年2月28日、県教育委員会発行。）の方形プランをもつ住居址群もやはり5世紀中葉ごろに編年されるものであろう。

これらの事例によって、5世紀中葉を中心とする古墳時代の本県内の住居址は、方形プランを基本的形式としていたことが推定されるのである。

2、方形周溝墓について

本県内においては、中原町姫方遺跡・鳥栖市本川原遺跡、そしてこの姫方原遺跡の3遺跡で都合4か所の方形周溝墓の調査が実施されている。しかし、姫方原の方形周溝墓を除き、遺物の出土は極めて少なく、しかも内部主体の構造についても明確でない点が多く、方形周溝墓の性格や年代などについてはなお多くの課題が残されていた。

この姫方原遺跡の方形周溝墓は、全面調査が不可能であったため、内部構造について未調査であるが、周溝内から土器を主体とするおびただしい遺物が出土した。土器には、壺・壇・壺・器台・鉢・深鉢・高壺・手捏土器などがあり、土器の他に、鉄斧・不明鉄器・大形石斧片などが出土している。

これらの遺物は、10~20cm余り溝底よりも上層に置かれていたのが多く、自然石なども混在していた。これらの遺物は、周溝内に堆積された状態で埋葬されていて、故意に遺棄し破碎されたという形跡は認められなかった。おそらく喪葬儀礼に伴のう遺物ではないかと推定され、数は少ないが鉄器類や手捏土器を含有している点が注目される。また、土器の中には、把手付器台や台付大形深鉢など、県内では他に出土例をみない土器も含有されている。

周溝内出土の土器（姫方原III式土器）は、関東地方における五領式あたりに比定される県内では現在判明している最も古い形式の土師器として注目されるものであり、本県内における土師器の祖形として位置づけられ、姫方原式と呼称されるべき土器形式であろう。また、この土師器の実年代は、4世紀中葉を中心とする前後ごろに比定されるべきであろうと考えられる。

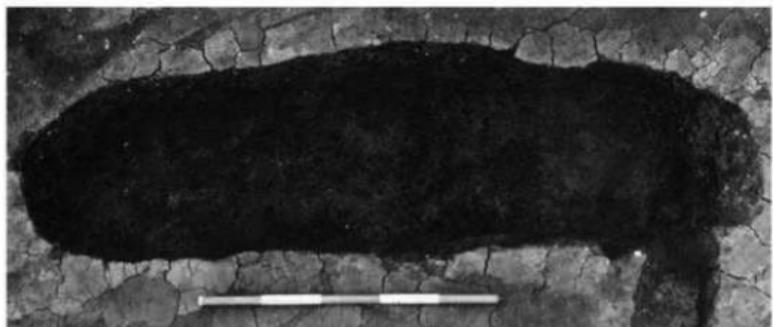
この姫方原式土師器の特色は、斜向・横向の幅広い整形の条線が通り、その上にたらに上下に通る刷毛目を残している。また、壺や深鉢などに高台を付したものが多い点も一つの特色であろう。

姫方原方形周溝墓は、周溝内出土の土器形式によって、4世紀中葉ごろに築成されたものであろうと推定され、本県内の方形周溝墓の編年の上からのみでなく、弥生時代墳墓から古墳へと移行するその変遷過程の謎を解く墳墓形式の一つとして、その価値が高く評価されるのではなかろうか。

図

版

1 土壤墓(1)



2 土壤墓(2)



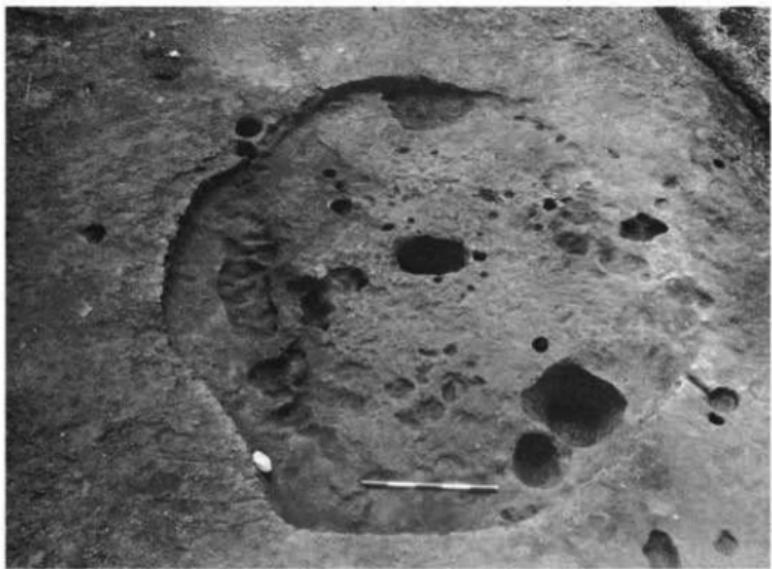
3 土壤墓内土器出土状况



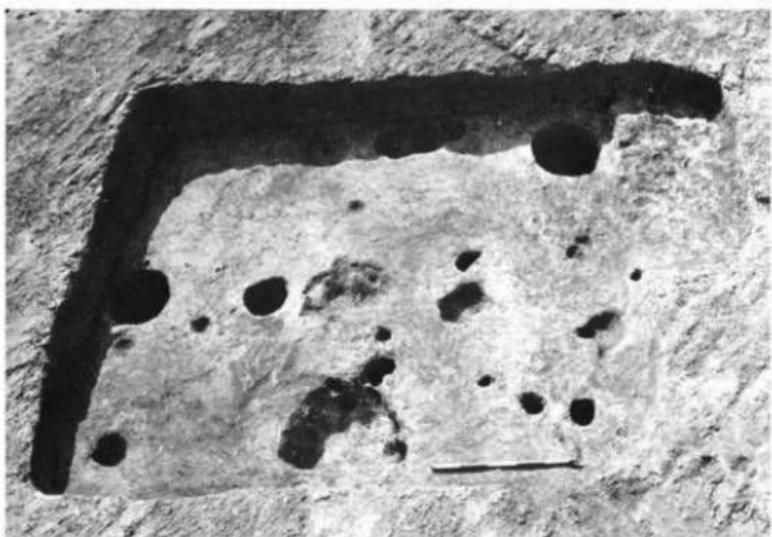
4 土壤墓内出土土器



5 第1号住居址



6 第2号住居址



7 第3号住居址



8 第3号住居址土器出土状况





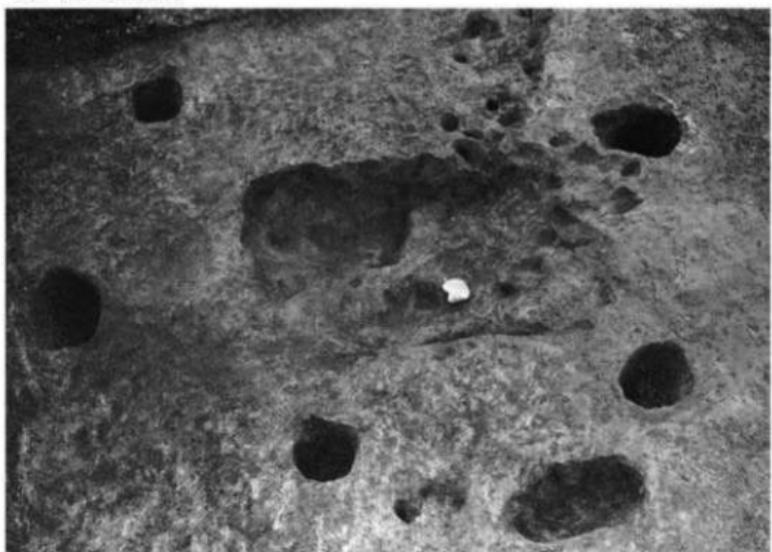
10 第6号住居址出土土器



11 第9号住居跡



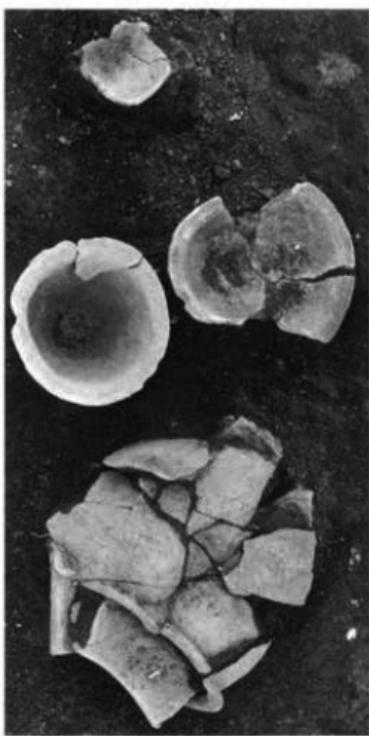
12 第2号貯藏穴



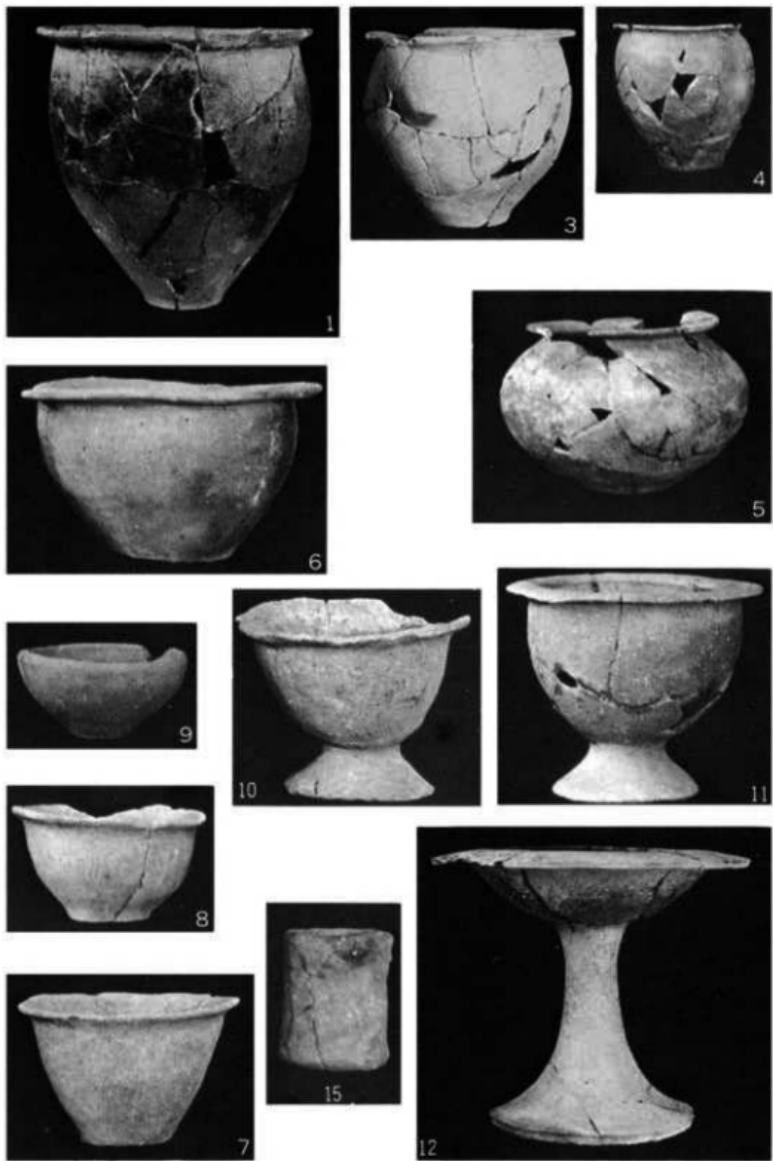
13 第10号住居址



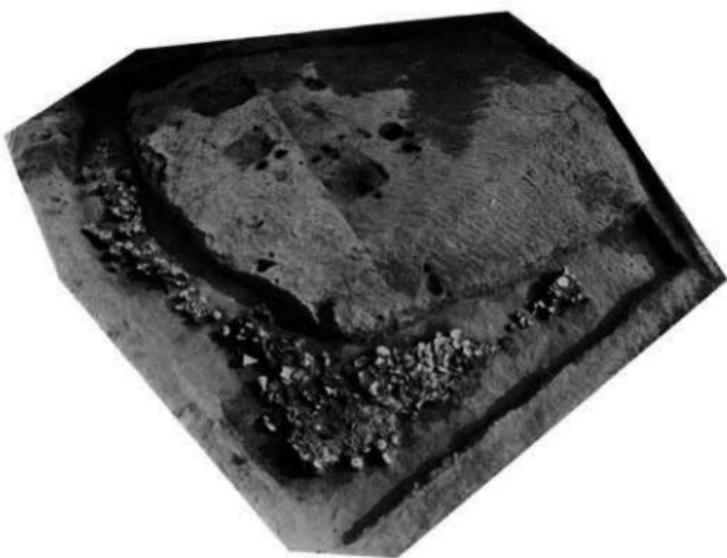
14 第10号住居址土器出土状况



15 第10号住居址出土土器



16 姫方原方形周溝墓（東側）



17 方形周溝墓東斷面（西側）



18 北溝遺物出土狀況



19 北溝遺物出土狀況



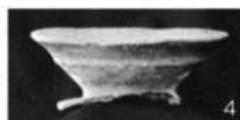
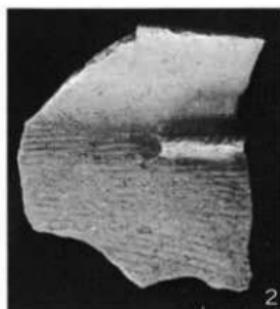
20 東溝遺物出土狀況（北側）



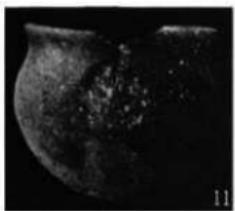
21 東溝遺物出土狀況（南側）



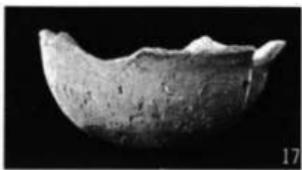
22 方形周溝墓出土土器(1)



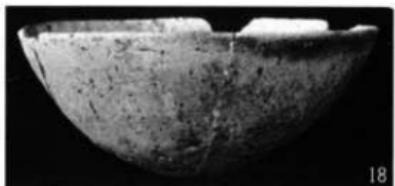
23 方形周溝墓出土土器(2)



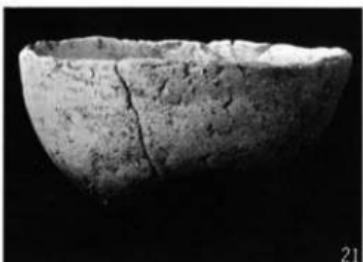
24 方形周溝墓出土土器(3)及び鉄斧



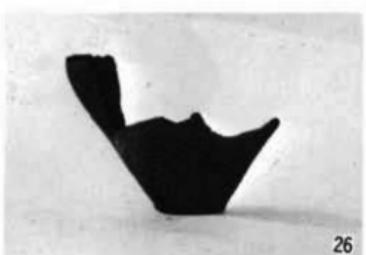
17



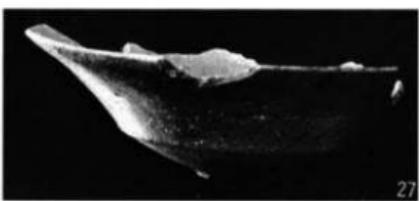
18



21



26



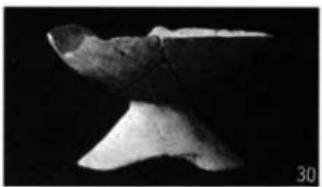
27



40



29

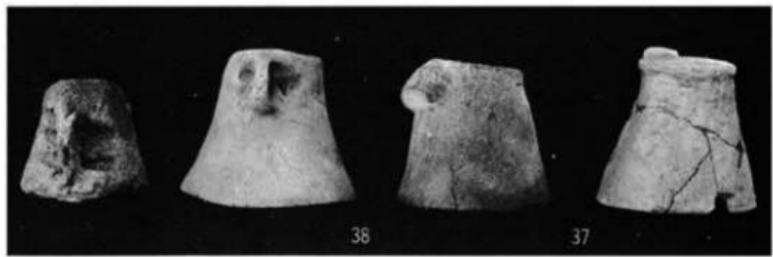


30



32

25 方形周溝墓出土土器(4)



あとがき

本報告書の作成の担当者は次の通りである。

★執筆 I 姫方原遺跡の調査経過	石限 喜佐雄
II 姫方原遺跡の環境	木下 巧
III 遺構・遺物	
1 遺跡の概要	木下之治
2 土壙	木下 巧
3 住居跡	
(1) A区の住居跡	木下之治
(2) B区の住居跡	石限 喜佐雄
(3) C区の住居跡	木下之治
(4) D区の住居跡	木下 巧
4 方形周溝墓	木下 巧
IV 総括	木下之治
★整図・トレース関係	天本洋一
★写真撮影・編集	木下 巧
★監修	木下之治

佐賀県教育庁文化課

佐賀県文化財調査報告書第33集

姫方原遺跡

印刷 昭和51年3月25日

発行 昭和51年3月31日

編集 佐賀県教育委員会文化課

発行 佐賀県教育委員会

印刷 佐賀印刷社

